
夢

水桐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢

【Nコード】

N3358S

【作者名】

水桐

【あらすじ】

ちよこつと流血？表現あり。銀髪コンビ。

久しぶりに昔の夢を見た。全てが断片的なもので紡がれ場面は目まぐるしく移り変わるまるで走馬灯のような夢だが、其処では優しくかった母と頼もしかった父は夢の中で最後に見た時と変わらず笑っていた。

夢の中というものは、疑問をほとんど持たない。何故此処にいるのか、何故この場面なのか、何故自分はここまで平静を保っているのかその全てに疑問などありはしない。故に夢の中だということさえも分からない時がある。雫玲の心境は今まさに「それ」だった。自分が何故過去の映像を見ているかすら疑問に思わずに、ただ傍観者としてその場にいた。

あまりの懐かしさと暖かさに思わずその場から歩み出そうとした瞬間、足元を掬われた。明確に言えば、足元の地面が「無くなった」とでも言うべきか。重力に逆らうことなどできるはずも無く、何故足元が消えたかという疑問すら持たず。其の深い深い何処かへ落ちそうになった瞬間雫玲は直感的に歩み出そうとしていた父母の方を振り返った。そして後悔する。

夢の最後に見たそれは、トラックと自動車が起こした交通事故の光景。割れたガラスに飛び散った血。立ちつくす幼き雫玲の目を叔母が覆った姿だった。

「……………」

雫玲はゆっくりと目蓋を開ける。その覚醒は悪夢を見た時のような衝動的なものではなく、それはゆっくりと現実へ引き戻されるような感覚だった。まだぼんやりとする頭である事に気付く。一つ目は涙を流していたこと。二つ目はまだ夜だということ。三つ目は腕

を窓へ、窓辺へ座り月を眺める『何か』へ伸ばしていたということ。
「…何してんだ。」

その『何か』が尻尾をふわりと揺らし、雫玲の方を振り向き言葉を発した。それが猫の姿をした銀迅だと気付いたのは数秒経った後だったが、特に何をする訳でもなく雫玲はぱたんとベッドへ腕を下ろし流れる涙もそのままに自身の髪の毛をぐしゃりと掴んで呟いた。

「……昔の夢見た。」

「…そうか。」

銀迅はそれ以上問い詰めることはなかった。窓からは月の光が差し込み部屋をぼんやりと照らす。思わず胸元にあるペンダントを触った時、銀迅がベッドに降りてきた気配がした。何かと思いい髪の毛を掴んでいた腕を離し首を横に向けてみると青と金の双眸がこちらを見ていた。首をかしげると二本ある尻尾がぺしりと雫玲の顔を優しく叩く。「わ、」と漏れた言葉と共に目を瞑った瞬間ベッドにかかる重量が増し、ぎしりと音を立てた。目を開けるとベッドの上に胡坐をかく銀迅がいた。

何をしてるのかさっぱり意図が読めず涙が溜まった目を丸くしていると不意に雫玲の頭に銀迅の手が伸びてきた。そのままがつしと頭を掴まれがくがく揺らされてわしゃわしゃと撫でられる。その行動に雫玲は更に混乱し、頭に疑問符を浮かべたまま為すがままになつていた。

「え、な、何…え？」

訳が分からずついに問いかけた雫玲を銀迅は相変わらず眉間に皺を寄せた仏頂面で見返す。妙な沈黙が続いたが、暫くしてから銀迅は口を開く。

「…こういう時人間は人肌が恋しくなるんじゃないのか？」

何故か質問を質問で返された。銀迅としても純粹に疑問に思ったらしく珍しく首までかき上げている。それを聞いて雫玲は暫く啞然としていたが、そのうち今まで見たことのない銀迅の姿に少し可笑しくなりぷつと笑った。確かに自分は人恋しかつたのかもしれない、

でもそんなことを素で言う銀迅が何処か不釣り合いで。そう思いながらくすくすと笑う雫玲を見て銀迅は更に眉間の皺を増やす。

「ふ、ははっ…ごめん、いや色んな意味で当たってるよ、うん。あんたが正しいよ。くっくく…」

それから少しの間笑いは止まらなかった。涙はいつの間にか笑い泣きへと変わっていた。銀迅はまだ納得いかないでも言うように尻尾をぱたりぱたりと布団の上を叩いては揺らしている。それもまた面白いと言ってしまったら怒るんだろうなと心の中で思った。

「どうでもいいがお前、寝なくていいのか。」

「ああ、大丈夫明日…あ、今日は休みだから。」

平行線を辿りそうなやりとりに終止符を付けようと思ったのか銀迅がいきなり話を切りだした。そう言えば何時なのだろうかと時計に目をやると深夜の二時を過ぎたばかりで、休みでよかったなと頭の片隅で思う。雫玲は睡眠時間を十分に取らないと朝大変なことになるタイプで睡眠時間の長さによってその日の調子が全く変わるのだ。

しかし幾らなんでもそろそろ寝なくては、と再びベッドに横たわり銀迅から目を少し離れた瞬間、彼はもう猫の姿に戻っていた。そして足元の布団の裾に丸くなる彼を見て、寝る姿はそこら辺にいる猫と同じような姿だなと思いきやまた吹きだしそうになったが堪えた。こんなことは珍しく、今は嬉しさの方が勝り一人きりの部屋ではないということが無性に嬉しくて仕方なかった。

足元に暖かさを感じながら雫玲は再び目を閉じる。月は高々と天の真中へ昇り部屋を煌々と照らしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3358s/>

夢

2011年10月8日19時37分発行